

心と心をつなぐ 女と男の情報誌

# アイアム

「アイアム」ってご存知ですか？

～自分の考えを自分の言葉で話す、そんな生き方がしたい～  
…そんな意味を込めて

Vol.

34



## 少子・高齢化

特集

どう取り組む？どう変える？～選択すべき道～

# 少子・高齢

どう取り組む？どう変える？～選択すべき道～

## クロストーク

歯止めがかからない少子高齢化のゆくえ

今、何が一番変化しているのか…、そんな中で未来を見据えながら、次世代のために今できること。

私たちが選択すべき道とは何か。いくつかの重要な課題に焦点ををあてながら考えてみたいと思います。



岸田 美枝子 さん

現在 NPO法人  
福井県子どもNPOセンター  
理事長  
NPO法人  
福井芸術・文化フォーラム  
副理事長（事業部長）  
福井県不登校総合対策検討  
委員会 委員  
福井県子どもの居場所づくり  
推進協議会 委員  
福井県福祉のまちづくり推進  
委員会 委員  
河合の庄文庫 主宰

## これまでの経験から～子育て環境の変化

岸田：私の長女（30代）が子どもの頃、専業主婦はクラスの中に半分くらい。子ども劇場やPTA活動などは、専業主婦の社会参加の場だったと思います。今は、正社員でなくても、パート・アルバイト・内職など、何らかの形で仕事を持っている人が増え、専業主婦という言葉は、ほとんど死語になるほど少なくなっています。子どもは3歳から保育園に入れ働きに出たい、小学生になったので自分も何か始めたいと、思っている女性の方たちはとても多くなりました。

揚原：逆に私の妻は専業主婦で、3人の娘を育てているのを見てると、それだけで手一杯…余裕はないですね。妻に「何か仕事をしに出なさい」と言ったらそれこそ悩みまくって、本当に出なさいいけないのかって嫌がると思います。確かに主婦専門の人は減ってますね。もし私に家事の半分とまでいなくても、5分の1やりなさいって言われたら、そのためにどれだけのことを犠牲にしなくちゃいけないかを考えると、ケースバイケースですね。

岸田：わが家もそうでしたが、夫は家の中のことは私にまかせっきりでした。夫は外で働き、妻は子育てや家事を全てやってる、その役割分担の中でずっとやってきました。だから長女に子ども（初孫）ができた時、夫は、この人間をどうやって扱っていいかが全く分からない。自分の子どもを経験していない。どうやってお風呂に入れていいのか、そのちっちゃい生まれたばかりの赤ん坊を目の前にして、何もできない。私がいろんなことができると、「おまえはすごいね」って。

実際は、私の社会的な活動範囲が広がっていった背景には、夫の母の力が大きいですね。

子どもが熱を出し、助けてって言った時のヘルプがすぐにできること、親がサポートしてくれる体制ってというのが近くにあること、福井ってそれが大きいなと思います。

『三世同居』も福井は全国的に見ても多い方ですが、『三世近居』という、何かあった時にサポートしてくれる体制が大切ですね。

揚原：それって理想的ですね。一緒に住むとトラブルがあるかもしれないけど、近くで助けてほしい時に助けてくれるのが現実的で一番いい。

岸田：親だけでなく、社会の中でも、ヘルプって言った時に「あ、いいよ」って助けてくれる仕組みがあることは、子どもを育てていく上で、とても大事です。娘は34歳で子どもを産んで、育休を1年とって4月から復帰しました。子どもは延長保育を含めて、朝8時から夜の7時まで11時間保育園にいて、熱が出て職



揚原 安彦さん

1992年  
江守商事株式会社入社  
1994年  
江守商事株式会社 取締役  
2003年  
社団法人日本青年会議所  
第52代会頭  
2004年  
江守商事株式会社  
常務取締役（現職）

以下4頁に続く▶▶▶

# 化

少子化に歯止めをかける男女のあり方、共同参画への道とは…

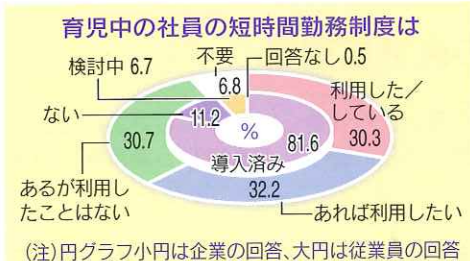
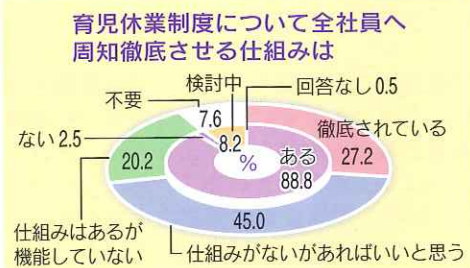
男性も含めた働き方の見直しとは…

シルバー世代の力を借りた地域・社会全体で担う子育て環境とは…

少子高齢化を見据えた社会保障制度のあり方とは…

これらの視点から少子高齢化時代の重要な課題に対して、私たちが今できること、身近な環境を変えるヒント、意識の変化などを探ります。

## 少子化は止まるのか？



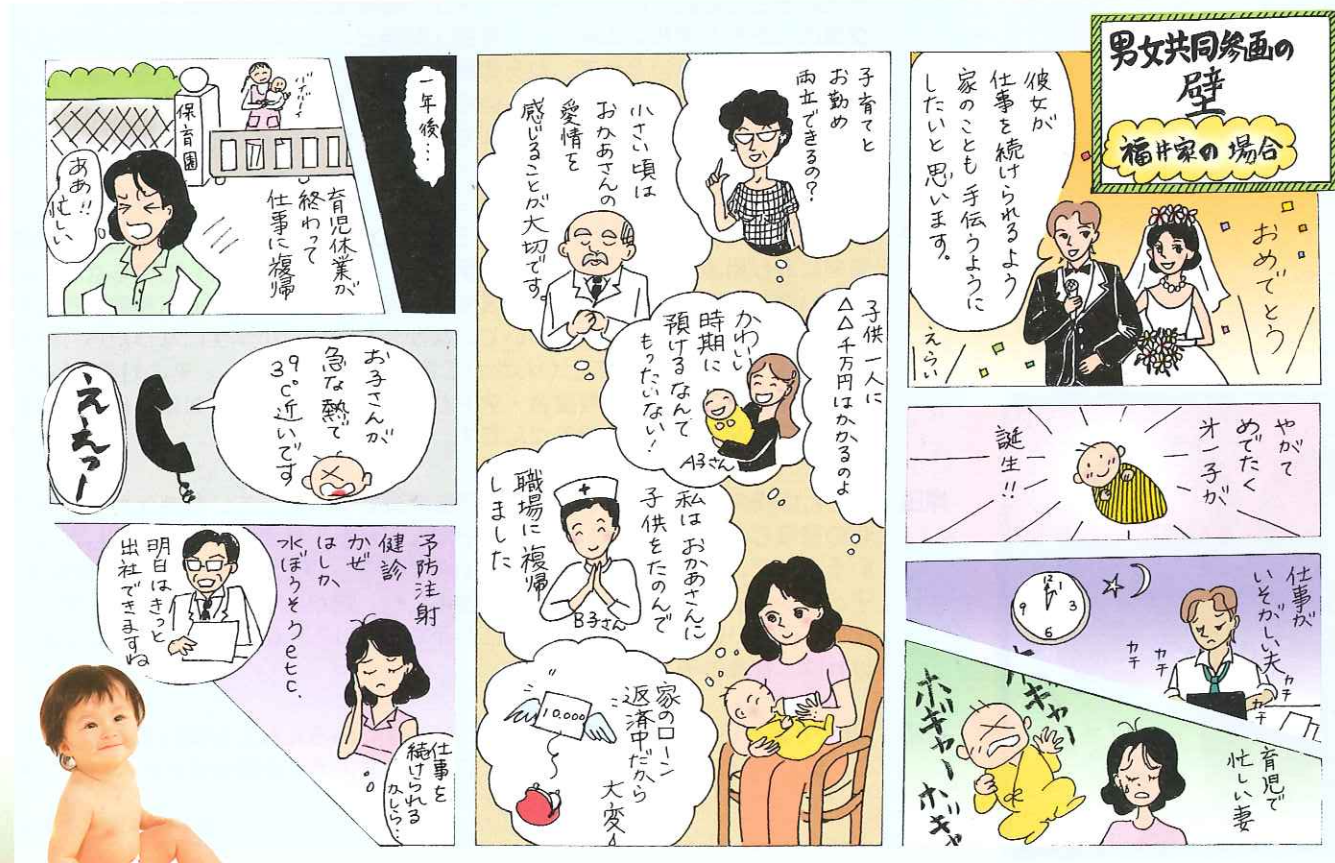
(注)円グラフ小円は企業の回答、大円は従業員の回答

出典：日本経済新聞 2006年6月19日掲載

厚生労働省は、人口動態統計で、2006年上半期の出生数が増加に転じたと発表した。その中身は出産適齢期である30代前半の女性(団塊ジュニア)が出生数をけん引しているのであって、やがてその数は減っていくであろうという現実が予測される。

政府はエンゼルプランから少子化対策プラスワンまで次々と対策を打ち出してきたが、効果は今ひとつであった。そのような中で福井県の出生率が全国2位と躍進したのは、三世同居により働く女性の子育て不安が軽くなり、収入も安定して、他県より環境が整っていることが大きな要因といわれる。

けれど仕事と子育ての狭間にはまだまだ沢山の問題がある。育児休暇ひとつとってみても、企業はコスト面で代わりの人を確保できず、仕事量が減らないため、「短時間勤務」を申請してもかなりの無理をしなければならぬ。更に職場内の理解も得にくく、出産する女性は企業にとつてリスクととらえる会社も少なくない。今、子育て中の夫婦の多くは「もっとゆとりが欲しい」と訴えている。こうした実態を見て少子化問題は家庭から企業における取り組みへと移りつつあるのではないだろうか。





場に電話がかかってくれば、やっぱり飛んで帰らなきゃいけない。そんな時、病児保育に預けられるとか、サポート体制があることはいい。女性が働きたい、自己実現したい思いを達成するための、子育てサポートが社会的に存在する時代になってきたのも、今の時代の新しい流れですね。

## 求められる働きやすい環境づくり

揚原：平成12年から、会社の制度として整備を進めてきました。最初のうちは、制度はあっても使う人が少なかったのですが、今は産休・育休は結構長く取る人も増えましたね。結婚退職や第一子を妊娠した時点での退職も少なくなって、可能な限り仕事を続けようという方向に変わってきています。会社もそれには応えていこうとしているんです。

岸田：子どもが病気になったり、参観日に出たいというのは、母親だけでなく父親も同じで、当然あるわけですよね。職場の中で『お互い様』っていうような感覚で物事が動いていく仕組みはなかなかつくれないものなんですか。

揚原：何がフェアかを考えると、その瞬間の社会人なり企業人としての自己評価と外からの評価のギャップが少なければいいと思うんです。同じ産休を取って復帰するっていうことも、産休前のスキルをどれだけ維持しているとか、どれだけ努力するとかは一般論でなく一人一人個人差が大きいですから、フェアに評価した方がいい。この20年の間に、当社の家族主義的経営は大きく変わりました。人間関係は大切にしながら、ベタベタせずに一線を引いて、ルールを明確にした方が働きやすいと感じるようになってきています。

## 子どもは社会の子～三つ子の魂育成運動

揚原：みんなが自分の子どもに他の子どもと同じことをやらせたい、してあげたいって思いすぎるんじゃないですか。自分の子だけそうするには少し勇気がいりますけど…。

岸田：「うちの子も同じように」という方向が子ども達の忙しさに拍車をかけています。親は学費や塾・お稽古代を稼ぐために働き、結果、お惣菜の購買率が日本一の福井県です。

一人の子ども周りにたくさんの大人がいる環境が本当は必要なんです。企業の人たちが学校に向かい、社会人教師としてお話をするという事業もあります。子ども達にとって、自分の親の職業しか知らなかったのを、違った大人の視点から物事を考えられる。いろいろな他人の大人の在り様を、自分の将来の進路と結びつけて考えることができる、といった子ども自身の未来につながると思うんです。

揚原：3年前に日本JCの会頭だった時に、「三つ子の魂育成運動」という事業を一年間真剣に取り組みました。義務教育の手前に、社会が仕組みとしてやらないといけない部分が残されていると思います。お母さんが悩んでいても相談する人がいないとか、幼児の頃は気がついていなかったのに、小学生になったら「うちの子全然ダメ」みたいなことがわかってひどく悩んでしまう。その対策として、幼稚園や保育園に地域の経験者・アドバイザーがいて、親を対象にした教育をする必要がある、という提言なんです。

岸田：子どもは親の責任で育てる、家族の責任で育てると言っていた時代から、少子化の背景もあって、子どもは社会の子なんだから、社会全体で育てましょうという方向で、いろんな施策が展開されています。子どもが社会の子であれば、子どもが自ら自分の意見をきちんと言えたり、親からもプライバシーを守られたり、何がいいのかの情報を得ることができたり、ということが自分でできなければ、社会の子とは言えない。

揚原：「社会で育てる」ことは、その子の親だけでなくいろんな人が関わることによって、偏りのリスクが減るということですね。友人の子を預かるとか、自分の子

以下6頁に続く▶▶▶



# シルバー世代が子育て支援

## 交流の中で育まれる “安心して楽しい子育て”

共働き家庭と核家族が急激に進む中、こうした家庭をサポートし、親が安心して子育てできるように、福井市にはさまざまな制度があります。その委託事業をうけてシルバー人材センターが開設している子育てサポートセンターを訪ねてみました。ここでは、経験と知識豊富なシルバー世代が若い世代と交流しながら子育ての悩み相談を受けたり、一時的に親の生活時間をケアするなどの取り組みを行っています。

### 日だまりの家

福井市大宮の一角に、広い敷地の中に庭園に囲まれた瀟洒な住宅があります。それが「日だまりの家」です。

かつては普通の民家でしたが、今はシルバー人材センターが改修して子育てサポート等の事業を行っています。その中の広々とした洋室には燦々とした陽光がさしこみ、庭の緑の芝生やピンクのつつじの花が美しく映え、安らぎの雰囲気をかもしだしています。

ここでは、6ヶ月の幼児から就学前の子どもを対象に、1日10名を限度で預かっています。

午前8時30分より午後5時30分まで、毎週月曜から土曜まで開いていて出入りは自由です。

保育士の先生と、保育養成講座修了生を含め、4人が担当し、紙芝居、本の読み聞かせ、ときには遊び仲間になり、子どもと共に芝生の上を駆け回り、木の実や落ち葉ひろいなど「日だまりの家」ならではの、のびやかな環境があります。



### あ・の・ね

福井市文京のワークプラザ内にシルバー世代のボランティアによる子育て支援の拠点があります。月・水・金の午前9時30分から午後4時まで開かれています。親または近親者の付き添いでゼロ歳児から3歳児までが対象です。料金は無料です。

ボランティアは、退職した学校長や保育園長などベテランの方々支援にあたっています。皆さんは現在までのキャリアをいかし、絵本を読んだり歌やおもちゃで親子共々あそびのリズムをつくり、その輪の中で子どもはママたちの膝にだけ、ゆったりと絵本を見たり聞いたりしています。

また、若い母親の子育て相談に際し、毎月発行「あ・の・ね・親子ひろば」では子どもと心身発達へのアドバイスを子育てメッセとして伝えていきます。この明るい広いスペースに、ゆったりとした空間が広がり、親も子どもも心がなごむようです。



「ばあちゃん！」先生をそう呼ぶ侑己。  
『この人は僕の3人目のおばあちゃん』と思っています。ママにもそんな場所です。  
古市育子さん・侑己ちゃん (2才4ヶ月)

新米ママの私でも、優しいスタッフやママ達との交流を楽しみながら、ゆとりある子育てを応援してくれる居場所です。  
高橋幸代さん・諒ちゃん (1才5ヶ月)



## 地域での男女共同参画の取り組み(美山地区)

地域での男女共同参画の取り組みについて、推進員の前田正治氏にお話を伺いました。



前田 正治 さん

平成15年に美山町で選出された20歳から65歳の8名の男女共同参画推進員が中心になり、笑いを入れた中で、少しでもその考え方を理解していただけるような劇に取り組みとういうことになり、敬老会など3回公演をした。

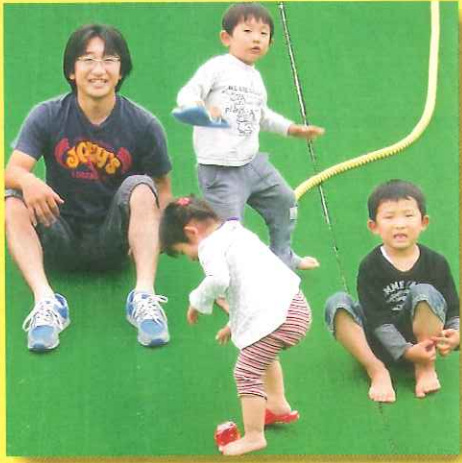
はじめは、男女共同参画とは女性を楽にすることではないかと、女性が強くなったから今の世の中が悪くなったのではないかなど、人それぞれの捉え方により思いが違った。しかし、話し合いを重ねていくうちに、求められているものがちよつと違うのではないかと思いついた。劇を通じ、家でも同じ場面が思い当たることがあった。今までは、女性ができる事でも夫の陰に隠れてしなかったし、女性はさせてもらえないこともあった。そこで男女の本当の役割は何か考えるようになった。

少子化問題については、例えば育児休暇を母親だけでなく父親も取りやすいように、社会が考えるようなバックアップは必要だと思

うが、現在核家族が増えていることも一因ではないかと思う。この劇を通じて何かが変わるといふ簡単なものではないが、劇をした仲間たちが性別、年齢差を越えて終わりの頃には自由にもが言えるようになったことから男女共同参画が始まるのではないかと思うと語られました。

美山地区の男女共同参画の取り組みは、方言を使ったり笑いを入れることで、おもしろい劇となり、とてもよかったです。男女共同参画」と大上段に構えるのでなく、人間としての思いやり、感謝する気持ちをいつも心がけていけばいいのではないかと前田さんの言葉に、改めて男と女の垣根を越えた温かい心が大切だと思いました。





を預けるとかを、もっと怖がらずにやればいいと思います。よその子や親と実際に触れることで気付くことはたくさんあるんじゃないんですか。親同士がお互い信頼しないとダメですが。

岸田：公務員宿舎に住んでた頃、そういうことが当たり前のように行われていました。同世代の子たちがたくさんいて、「今日は岸田ホテル」って言われたら、それで私の家はホテルなんです。「銭湯加藤」って言われたら加藤さんの家でみんながお風呂に入る。

夏になると一大イベントで、外でダンボールの家とか言ってそこでみんな寝てる。そういう70年代から80年代の子どもの遊びの世界の中で、自分の子どもたちが近所の大人たちについて育ってもらったなっていう実感がありますね。

## 高齢化社会への対応～幸せの前提

揚原：5月から雇用延長の新しい法律ができて、会社の定年は60歳と65歳の2つを基準にしています。

大切なことは、まずはやる気、そして自分のことをよく知ることです。やる気のある人と元気にやれる場があれば、うまくいくと思います。その時、かつてよりもいろんな評価が下がることにショックを受けたり、不当だと感じたりすることもあると思いますが、そっぽを向いてしまったら、社会と関わることができなくなってしまいます。年功序列、年を取った人は給料が高いということは、企業の中ではもう行われていません。社会の風潮として己を知ること、それを理解した上で頑張ることができる社会にしていかなくてはいけないと思います。

岸田：私の世代が2007年問題のトップランナーで、その後3年くらいは続くと思います。

行政の施策の中でも、団塊の世代を取り込もうという動きはありますが、少なくとも自分が今までやっていたこと、組織の中でやってきたことを活かせるNPOって、結構あると思います。それはNPOを立ち上げるということだけではなく、部分的に経理なら担えとか、広報なら得意、子どもと一緒にのこぎりを上手に引けるなど、人生60年やってきて、自分が楽しいこと、能力としてこれは活かせる部分があるなら、少しの謙虚さを持ってNPOの門を叩いてほしいと思います。その時、現役時代のネットワークを最大限活かしてほしい。会社しか知らなかった私たちの世代の男性へ、大いにエールを送りたい。

「あなたがやってきたことって、(これで終わりじゃなくて)これから活かせることがたくさんあるよ」って。30代後半くらいで家を買って、ローンも払い終わって、退職金をもらって、家を少し直して…で、これからどうしようかわからない。そんな寂しいことを言わないでって。

揚原：団塊の世代が日本の高度成長を支えたのは事実ですけど、今の55～60歳の人と、20年後にその年を迎える人とは、全然質が違うと思います。価値観も心配事も全然違う。共通なのはどんな時代でも、自分がちゃんと認めてもらえることが幸せの前提だということです。それは経済的な問題とは別次元ですね。NPOに関わって、たとえ報酬はゼロでも、そこで役に立っている実感がやっぱり嬉しいわけです。その証として一万円もらえると、かつて当たり前のようにもらっていた30万円より価値があったりする。己を知って、周りをしっかり認識して、自分の居場所をもつ。そのスタンスさえあれば必ずやっていけるところはあるし、企業もむしろ重用したい人はたくさんいます。

岸田：介護保険制度も含めて、お年寄りの人達が自分の人生をまっとうできるような社会的な仕組みというのが必要だと思います。同じように、子ども達も社会の一員として見守られるべきだと思っています。少子化と高齢化の問題は別々のものではなく、みんなが一人の人間として、生まれて棺桶の中に入るまで幸せに暮らせる、そういう社会のために税金を使ってほしい。

揚原：社会とはそういう仕組みでしょうね。その中で、個人としても企業としてもできる形で貢献していくことが大切ですね。



(終)

# 団塊世代にとって仕事とは？生きがいとは？

現在の「生きがい」の他に、何か興味のあることにチャレンジしたいと思えますか？

女性の約90%が「何か興味のあることにチャレンジしたい」と回答していることから、女性の方がチャレンジ意欲が高いことが分かる。

現在の仕事を退職した後、再び働きたいですか？

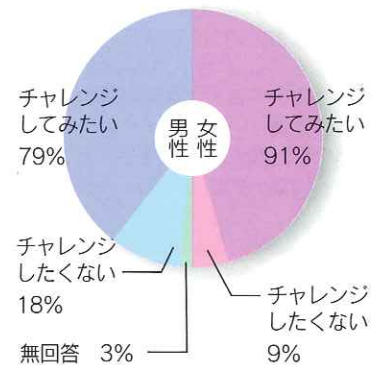
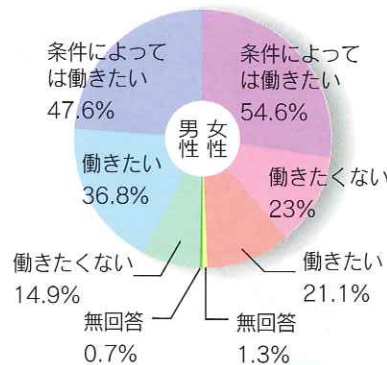
女性の場合「条件によっては働く」の回答割合がとて高いのに対し、男性は「働きたい」と回答する割合が高い。

## 自分のペースで働きたい！

今回の調査では、60歳を過ぎてからも、「仕事を続けたい」と考えている人は81%に達しており、団塊の世代で「就労がいかに重要視されているかがよく分かります。」

## 生きがいにチャレンジを！

現在「生きがい」と呼べるものを持っているとの回答は、48%となっていますが、その人達に「他のことにチャレンジしたいと思えますか」と質問したところ、「チャレンジしてみたい」との意欲的な回答が83%に達しており、団塊の世代の旺盛なチャレンジ精神を窺い知ることが出来ます。



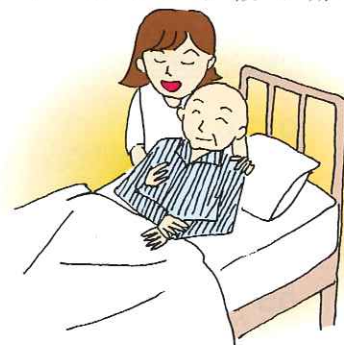
※このアンケートは、福井県すこやか長寿センター（旧福井県すこやか長寿財団）が平成18年3月に報告したものです。（県内69企業、55～59歳の2,012名に配布し、1,156名から回答を得ました。）

## 新しい介護保険制度に不安の声

今回の大きな改定に、利用者は勿論、介護の中心となることの多い女性からも負担が増すのではないかと不安の声が聞かれます。そこで、利用者Oさんの介護者である息子のお嫁さんAさんとOさんのケアマネジャーにお話を聞きました。

### ◆Aさんの不安◆

Aさんが介護するOさんは80歳、脳梗塞の後遺症で半身麻痺。杖をついてようやく移動が可能。言葉の障害や認知症はなく「要介護1」。介護保険を利用するようにになり、デイケアとショートステイを組み合わせたサービスで、Aさんは身体的・精神的に余裕ができ、パートをはじめたり遠方の実母を見舞ったりすることができていた。しかし、今回の改定で介護認定がわかり、Aさんはまた負担が増えるのではないかと不安に思っている。



た。そして、これらは「新予防給付」として新設された「地域包括支援センター」でケアプランを作成することになる。Oさんの場合は、リハビリで効果が見えているので、今回の認定では「要支援2」になるかもしれない。Aさんは介護保険制度ができるまで一人で介護してこられて大変だった。介護保険を利用するようになってから仕事に出たり、自分の時間も持てるようになった。もし「要支援2」になると、今より利用日数が減り、その分Aさんの負担が増えることになる。

予防を中心としたケアプランで利用者が今の状況をどれくらい保てるのか、在宅重視になれば介護者の負担がどうなるのか不安だ。

### ◆Oさんのケアマネジャー◆

大きく変わったのは軽度要介護者の在宅サービス分野。これまでの「要支援」が「要支援1」と「要支援2」に分類され、これまでの「要介護1」が「要支援2」になる可能性が出てき

新しい介護保険制度は、寝たきりや認知症になる人を少なくし、できるだけ在宅で生活することを目標としています。しかし、そのために、女性達が一人で介護を担うことが再びこのことのないことを願います。





## 『人は見た目が9割』

著者：竹内一郎  
発行：新潮新書  
定価：680円（税別）

おしゃべりやうまいのに信用できない人と、無口でも説得力にあふれた人の差はどこにあるのか。これを左右するのが顔つき、目つき、仕草、匂い、色などの「見た目」であり、言葉による伝達（バーバル・コミュニケーション）は、7%程度の力しか有していない。それほど言葉以外の伝達（ノンバーバル・コミュニケーション）のほうが伝達力が高いのだ、と著者はいう。

このことは、アメリカの心理学者アルバート・マレービアン博士の次のような実験結果から引用している。

- ・声の表情 ..... 55%
- ・声の質（高低）、大きさ、テンポ ..... 38%
- ・話す言葉の内容 ..... 7%

演劇や漫画を主戦場としている著者は、自分の経験則から第1話で「人は見た目が9割」と断定し、第2話以降「仕草の法則」「女の嘘が見破れない理由」「マンガの伝達力」「日本人は無口なお喋り」「色と匂いに出にけり」等について、分かり易く、洒脱に論を進めている。男性は嘘をついた時、目をそらすが、女性は相手をじっと見つめると述べている第3話では、思わず膝を叩いたが、一番興味深かったのが、「日本人は無口なお喋り」とのタイトルの第5話だ。

日本人を福井人に置き換えてもいいのだが、語らぬ文化、風土の中で、多くを語ることなく、お互いを理解しようとしてきたのが日本人（福井人）であり、そのベースには次の8つの心情が流れているとしている。即ち「語らぬ」「わからせぬ」「いたわる」「ひかえる」「おさめる」「ささやかな」「流れる」「まかせる」という特質であり、確かにこれまで日本人の美風として喧伝されている。

しかし、話しても1割程度の伝達力しかない、あとは、「あうんの呼吸で」といった価値観がまだまだ幅を利かせている風潮の中では、いかにもしんどい感じがしてならない。でも、男女共同参画も含めていろいろな分野で変革の必要性がうたわれている昨今、相手に分からせるためのコミュニケーション力を高めることは必須であり、そのためには、気恥ずかしいが、「見た目」にも気を配らなくてはということになるのだろう。

## パートナーからの暴力ホットライン

夫婦や恋人などからの**身体的暴力・精神的暴力・経済的暴力・社会的暴力・性的暴力・子どもを巻き添えにした暴力**に対し、下記機関があなたを支援します。

福井県生活学習館 配偶者暴力被害者支援センター	福井市下六条町14-1	0776-41-7111 0776-41-7112 火～日曜日9:00～17:00
福井県総合福祉相談所 女性相談課	福井市光陽2-3-36	0776-24-6261 月～金曜日8:30～17:15
福井県警察本部 警察安全相談室	福井市大手3-17-1	プッシュ式 #9110 0776-26-9110 24時間受け付け
福井県警察本部 女性被害者相談電話	福井市大手3-17-1	0120-292-170 0776-29-2110 月～金曜日9:30～17:15
福井健康福祉センター	福井市西木田2-8-8	0776-36-1116 月～金曜日8:30～17:15
福井県人権センター	福井市大手3-11-17	0776-29-2111 火～木曜日 } 9:00～17:00 第2,4土曜日 } 第2,4日曜日 } 金曜日 9:00～21:00
女性の人権ホットライン	福井市春山1-1-54	ゼロナナゼロのホットライン 0570-070-810 (PHS, IP電話からはつながりません) 月～金曜日8:30～17:15
NPO法人 福井被害者支援センター	福井市大手3-11-17	0776-31-5111 火曜日 15:00～19:00 土曜日 13:00～19:00

「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」  
(DV防止法) があなたを守ります。

## 編集後記

日本の「合計特殊出生率」は1.25と過去最低を更新した。政府は子育て支援の「エンゼルプラン」等で対策を立てているが、現実には改善のきざしはまだ見えていない。それは社会のひずみの中で「Help me」と叫んでいる人へ、真の支援が届いていないからではないだろうか。男女共同参画とは、こうした人々に光をあて手を携えていくことにある。本号では、こうした諸問題を各部門からの声として提案してみた。読者の皆様のご一考になれば幸いと願う。

## ご意見募集!

この情報誌、その他男女共同参画に関するご意見・ご要望を郵便、FAX、E-mailにて募集しております。

また、取り上げてほしい内容がございましたらお気軽にご連絡ください。

☆次回35号は3月発行予定です☆

〒910-8511 福井市大手3-10-1  
福井市役所  
男女共同参画室・少子化対策センター  
TEL:0776-20-5353 FAX:0776-20-5742  
E-mail:danjo@city.fukui.lg.jp

## 企画・編集／アイアム編集委員

岩木 弥恵子 田中 芳枝  
戸出 瞳 畑岡 久子  
藤井 輝雄 蓮花 慶子

(50音順)